

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)・2)・3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。 2)被災文化財関連情報に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 3)文化財に係る図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	○江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）、橘川英規（研究員）、安永拓世（研究員）、小山田智寛（研究員）、阿部朋絵（研究補佐員）、細川民子（研究補佐員）、増田政史（研究補佐員）	
【年度実績と成果】		
○全所的文化財情報を発信するため4半期ごとにアーカイブズWG協議会を開催した（5月31日、6月29日、9月22日、30年3月23日）。「研究情報の保存・開示に関する基準」についての所内ガイドラインを策定・実施して、適切な研究データ管理を推進すると同時に、成果公開のための情報の標準化・規格化を進めた。		
○資料閲覧室のレファレンス機能の拡充		
・当研究所無形文化遺産部が所蔵する音声映像資料を、資料閲覧室で視聴に対応するよう環境を整えた。		
○美術資料のデータ化と公開：サントリー美術館所蔵「四季花鳥図屏風」・「泰西王侯騎馬図屏風」、徳川美術館所蔵「源氏物語絵巻」に関するデジタルコンテンツ等を作成し、所内公開を行った。		
○明治・大正期刊行の雑誌類等資料のデジタル化推進		
・当研究所及び東京美術倶楽部所蔵の『売立目録』について、収載内容が画像ともども検索できるシステム改良を行い、併行して収載内容のデータ入力を進めた。		
・当研究所の所蔵する近現代の美術作品カード（絵葉書資料）のデータ入力を進め、公開のための準備を行った。		
○資料閲覧室の運営・管理		
・資料受け入れ数：和漢書 3,066 件、洋書 121 件、展覧会図録・報告書等 1,374 件、雑誌 3,846 件（合計 8,407 件）		
・閲覧室利用状況：公開日総数 137 日・年間利用者合計 931 人		

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、当研究所の活動と研究成果を広く周知することをめざし、オープンアクセスのみならずオープンサイエンス対応のため、当研究所として保存すべき情報・資料について具体的な指針を定め、実施した。②独創性においては、当研究所が有する専門性・独自性の高い文化財情報の公開を念頭におき『売立目録』を、また、英文を併載して国内外から閲覧希望の多い『在外日本古美術品保存修復事業 報告書』について、web 上での公開を目指してデータベース化を進めた。③発展性においては、国内外の関係機関と連携して、国内外に情報発信するための取り組みを積極的に行い、今後の活動の基盤を強化した。④継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化作業を年間通じて順調に進めた。あわせて、高い利便性と安定した資料の保管の双方に配慮しつつ、資料閲覧室としての公共性と高い専門性を保持した運営を行い、週 3 回、一般利用者への所蔵資料の提供を行った。以上により、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	B	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 美術資料のデジタルコンテンツ制作と公開 3 件 (①) 論文等 1 件 (②)	定量評価
		—

①サントリー美術館所蔵「四季花鳥図屏風」・「泰西王侯騎馬図屏風」、徳川美術館所蔵「源氏物語絵巻」（30 年 3 月）
②佐野千絵・橘川英規「電動集密書架の定期的散開による環境制御効果の検討」（『保存科学』57 号、30 年 3 月）

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	28 年度に引き続き 29 年度は、文化財研究の専門機関として研究成果・情報のデータベース化にあたって、汎用性・利便性を視野に入れつつ公開を推進し、あわせて資料閲覧室としての公共性と専門性の双方を有する運営を進めることができた。30 年度以降も当研究所が行う文化財の調査研究とその成果を集約しつつ、データベースの継続的拡充を行い、専門的アーカイブと総合的レファレンスの充実が見込まれる。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。特に全国遺跡報告総覧を充実させる。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○森本晋（部長） 高田祐一（文化財情報研究室研究員）	
【年度実績と成果】 - 文化財情報電子化の研究を行い、GIS（地理情報システム）を活用した遺跡情報の分析に関する研究発表 1 件と全国遺跡報告総覧に関する研究発表 2 件を行った。 - 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像、考古関連雑誌論文情報補完の各データベースに関して、データの入力・更新を行うとともに、公開データベースの更新を行った。 - データベースのデータ件数は 29 年度末で以下のとおり、順調に増加している。ただし（）内は 28 年度末の値。（単位:件） 全文 213,927(213,810)、木簡 166,658(166,231)、抄録 103,028(96,474)、写真 729,474(640,855)、 遺跡 483,842(480,794)、航空写真 1,393,190(1,386,456)、図面画像 346,672(316,990)、論文補完 95,967(91,694)。 - 埋蔵文化財の発掘調査報告書の全文検索データベース「全国遺跡報告総覧」に関して、関係機関との協議を計 9 回行ったほか、全国各地で説明会を 5 回開催した。		
		
全国遺跡報告総覧説明会		

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

①適時性においては、最新のデータを提供して充実を図っている。②独創性においては、全国遺跡報告総覧のように他に類を見ないデータを提供しており、独自のデータ解析も提供している。③発展性においては、既存のデータベースの内容を着実に充実させているとともに、データベースの機能強化を実現している。④継続性においては、大規模なデータベースを維持し、確実なデータ提供を多年に渡って実現している。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	A	A	A	

【目標値】

・文化財に関するデータベースの公開件数 24 件

【実績値・参考値】

(実績値) 公開データベースの件数	31 件	B
(参考値) 公開データベースのデータ件数	1,417,962 件	
データベースへのアクセス件数	10,149,058 件	
研究発表等数	3 件 (①②③)	
全国遺跡報告総覧データ件数	21,083 件	
アクセス件数	8,604,581 件	

①高田祐一・国武貞克「全国遺跡報告総覧における旧石器関係シソーラスの構築」日本旧石器学会 総会・研究発表・シンポジウム 7月1日

②高田祐一「全国遺跡報告総覧と考古学ビッグデータ」奈良文化財研究所第9回東京講演会 10月7日

③森本晋ほか「編年時間参照系モデルによる曖昧な時間属性に対する問合せ方式の実装」地理情報システム学会 10月28日

中期計画評価	A
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の機関の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	文化財情報に関する基礎的な研究を積み重ねつつ、継続性が重要なデータベースの充実を着実に進めている。他機関と協力して進める大規模データベースである全国遺跡報告総覧ではアクセス件数が大幅に伸び、中期目標を超える成果を上げ続けており、今後の発展も期待される。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○津田保行（連携推進課長）、渡 勝弥（課長補佐）伊藤久美（事務補佐員）ほか	
【年度実績と成果】 ・資料の収集・整理・保管・提供 書庫の狭隘化に伴い、空きスペースを活用した図書の移動作業を行った。また、全国遺跡報告総覧の登録データと図書資料の書誌データを照合し、差異があった場合には図書の書誌データを修正する作業を開始した。 ・利用者サービス 一般利用者の閲覧室における閲覧可能冊数上限を5冊から10冊に引き上げたことにより、利用者サービスの拡大と業務の効率化を行った。		
購入図書	649冊	
寄贈図書	7,638冊	
雑誌	3,068冊	
一般利用者数	380人	
利用冊数	2,829冊	仮設庁舎の閲覧室（平成30年度に引っ越しを予定）
来館者複写件数	1,041件	
遠隔利用：複写受付件数	560件	
貸借貸出冊数	108冊	

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】					
①適時性において、利用者のニーズに対応した資料の収集・配架を行った。②発展性において、全国遺跡報告総覧との整合性を整備した。③効率性において、一般利用者の閲覧可能冊数の上限を引き上げることにより、業務の効率化を行った。④継続性において、従来の継続的な業務を滞りなく行った。以上の観点から本事業は順調に推移したと判断する。					
観点	① 適時性	② 発展性	③ 効率性	④ 継続性	
定性評価	B	B	A	B	
【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値) 資料閲覧室・図書資料室の開室日数 183 日 資料閲覧室・図書資料室の利用者数 380 人 文化財に関する資料・図書等の総件数 466,253 件				定量評価
					—

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。
評定理由及び今後の見通し	当初、仮庁舎での運営が2年間とされており、2年間分の書庫スペースしか確保されていなかったところ、2年間の運営延長となったことにより、書庫スペースの維持・活用が危ぶまれたが、書架の追加設置や余剰スペースの有効活用等により、サービスを低下させることなく運営することが出来た。 新庁舎への引っ越し後は、閲覧室の狭隘化となるため、蔵書検索用端末の削減または別置及び書庫までの距離が遠距離となるため、一般利用者には閲覧希望資料の事前申請制を導入し、待ち時間の短縮を計画している。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1)定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』（年3冊） ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
東京文化財研究所	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○亀井伸雄（所長）	
【年度実績と成果】 ・『東京文化財研究所年報』2016年度版 ・『東京文化財研究所概要』2017年度版 ・『東文研ニュース』年3回（64～66号） ・『美術研究』（422号）（29年6月） ・『美術研究』（423号）（29年12月） ・『美術研究』（424号）（30年3月） ・『平成28年版 日本美術年鑑』（30年3月） ・『無形文化遺産研究報告』第12号（30年3月） ・『第12回無形民俗文化財研究協議会報告書』（30年3月） ・『保存科学』57号（30年3月）		
		 『東京文化財研究所概要』

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

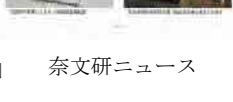
下記各観点から評価を行なった。①適時性においては、『美術研究』で翻訳により海外における研究の新動向を紹介できたこと、『日本美術年鑑』において近年の動向をきちんとまとめて報告した点が評価される。②発展性においては、『保存科学』刊行では、29年度は投稿された論文に対して、より厳正な査読を行うために、『保存科学投稿規定』の改定を実施した。その結果、文化財の保存と修復に関する幅広い内容の報文、報告を学術論文としてのより高い水準を担保しつつ公表することができた。③効率性においては、『日本美術年鑑』及び『美術研究』の編集作業で刊行物アーカイブシステムを本格的に導入した点や、電子メール送受による校正作業を積極的に実施した点が評価される。④継続性においては、28年度に引き続き、カラー図版を含む原稿をウェブサイトからダウンロードできるようにしたため、当該分野における『保存科学』の地位を高めることに貢献した。⑤定量評価においては、所期の予定通り、29年度も文化財に関する調査研究の成果に関する刊行物を刊行することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】 ・定期刊行物等の刊行件数 12点	【実績値・参考値】 （実績値）定期刊行物等の刊行件数 12件（以下のとおり） 『東京文化財研究所年報』2016年度版 刊行部数 500部 『東京文化財研究所概要』2017年度版 刊行部数 2,700部 『東文研ニュース』64～66号 刊行部数各 1,600部 『平成28年版 日本美術年鑑』刊行部数・配布部数各 600部 『美術研究』422号～424号 刊行部数各 400部、・配布部数各 380部 『無形文化遺産研究報告』第12号 発行部数 600部 『第12回無形民俗文化財研究協議会報告書』 発行部数 700部 『保存科学』57号 発行部数 650部				定量評価
					B

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。
評定理由及び今後の見通し	中期計画どおり定期刊行物の作成を順調に実施することができた。また、各研究プロジェクトの総括的な研究成果を多く公表することができた。 30年度も、引き続き、学術誌としての一定の水準を保ちながら刊行する計画である。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)・2)・3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施するとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。1) 定期刊行物の刊行 『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈文研ニュース』・『埋蔵文化財ニュース』 2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 3) ウェブサイトの充実
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
研究支援推進部 企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】○津田保行（連携推進課長）、渡 勝弥（連携推進課課長補佐）梶原孝次（連携推進課課長補佐）、ほか	
【年度実績と成果】		
◆定期刊行物の刊行		
・奈良文化財研究所概要 2017 30 年 6 月刊行予定、3,000 部 ・奈良文化財研究所紀要 2017 30 年 6 月刊行予定、3,000 部		
・奈文研ニュース「No. 65」29 年 6 月「No. 66」29 年 9 月「No. 67」29 年 12 月「No. 68」30 年 3 月		
・埋蔵文化財ニュース 30 年 3 月「No. 170」「No. 171」「No. 172」「No. 173」		
◆現地説明会		
5 月 21 日 平城宮東院地区の発掘調査（平城第 584 次）現地説明会 於奈良市法華寺町 685 ほか（参加者 519 名）		
12 月 23 日 平城宮東院地区の発掘調査（平城第 593 次）現地説明会 於奈良市法華寺町 685 ほか（参加者 823 名）		
10 月 7 日 東大寺東塔院跡の発掘調査（平城第 589 次）現地説明会 於東大寺東塔院跡発掘現場（参加者 801 名）		
30 年 3 月 3 日 藤原宮大極殿院の発掘調査（飛鳥藤原第 195 次）現地説明会 於橿原市高殿町（参加者 645 名）		
◆講演会		
6 月 17 日 第 120 回公開講演会 講演者：浦、清野（陽）、前川（参加者 195 名）		
10 月 7 日 第 9 回東京講演会タイトル「デジタル技術で魅せる文化財」講演者：森本・高田・渡邊・広瀬・山口・村田（参加者 340 名）		
6 月 10 日 飛鳥資料館の春期特別展記念講演会「藤原京の役所を探る」10 月 28 日 秋期特別展記念講演会「高松塚古墳の構築技術を解明する」		
11 月 11 日 第 121 回公開講演会 講演者：所長、大澤、岩戸（参加者 154 名）		
◆シンポジウム		
9 月 29 日 第 1 回 報告書データベース作成に関する説明会 12 月 20 日 第 2 回 30 年 1 月 23 日 第 3 回 2 月 2 日 第 4 回 2 月 20 日 第 5 回		
12 月 8 日 第 21 回古代官衙・集落研究集会「地方官衙政庁域の変遷と特質」（参加者 144 名）		
12 月 9 日～10 日 文化的景観研究集会（第 9 回）（参加者 105 名）		
12 月 22 日 遺跡整備・活用研究集会（参加者 77 名）		
30 年 2 月 3 日～4 日 第 18 回古代瓦研究会シンポジウム（参加者 141 名）		
30 年 3 月 9 日 保存科学研究集会 2017「金属製遺物の調査・研究に関する最近の動向」（参加者 102 名）		
◆体験型イベント		
8 月 9 日～10 日「つくろう!!ミニチュア玉枕」（飛鳥資料館）阿武山古墳から出土した玉枕のミニチュアをビーズで作るイベント（参加者 103 名）		
8 月 22 日～23 日「奈良の都の木簡に会いに行こう!」子供達が発掘現場から持ち帰った木簡を含む土の洗浄・選別作業や木簡の解説等の体験を行った。（参加者 70 名）（日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」採択事業）		
◆ウェブサイトの充実		
・全国遺跡報告総覧における発掘調査報告書等の公開件数が 21,187 件、ウェブサイト全体のアクセス件数は 10,887,187 件（28 年度 4,990,661 件）を達成した。		
・奈文研ブログ「探検！奈文研」No164～182 「コラム作寶樓」月 2 回更新		
・飛鳥資料館のウェブサイトリニューアルして、庭園、常設展示、特別展示等の展示内容の紹介とともに、「学び」 奈文研ニュースのページを新たに追加して、学習の場として利用する際のポイントを紹介		





年度計画評価		A			
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、調査研究の成果を適時に刊行するとともに、現地説明会開催、ウェブ公開いづれにおいても即時的に情報を発信した。②独創性において、当研究所の調査・研究内容の新規性及び卓越性を持たせ発信することができた。③発展性においては、個々のデータベース登録数も増え、多様なブログ、コラム等を更新することによりHPの内容を一層充実させた。また、当研究所の調査研究の成果を多角的に発信するために体験イベントを実施した。④継続性においては、定期刊行物、講演会、ウェブ公開いづれにおいても従来から継続的に実施している上、データベースは随時、データを増加しており、アクセス数も上昇しているため、恒久的な提供と利用が認められる。⑤定量的評価の観点について、刊行数においては目標通りに実施することができ、公開講演会等においては目標を上回る回数を実施することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	A	A	
【目標値】 (1) 定期刊行物等の刊行件数 10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 10 回			【実績値・参考値】 (実績値) (1) 定期刊行物等の刊行件数 10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 19 回		定量評価 (1) B (2) A

中期計画評価	A
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	目標を上回る回数の公開講演会や現地説明会等を実施し、調査成果を精力的かつ多角的に発信している。また、全国遺跡報告総覧などウェブサイトの利用率は飛躍的に上昇している。今後も公開講演会、現地説明会、ウェブサイトの充実等を通じて調査研究の成果をさらに発信していきたい。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	平成 29 年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、津田徹英（部長）、小林公治（広領域研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）	
【年度実績と成果】 ○11月2日、3日の2日間にわたり、専門家はもとより広く一般からも聴講者を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。 ○当研究所より2名、外部より2名の講演を行った。それぞれの講演テーマは次の通りである。 ・江村知子（文化財アーカイブズ研究室長）「海を渡った日本絵画—ライブツィヒ民族学博物館所蔵「四条河原遊楽図屏風」の紹介をかねて」 ・山本聡美（共立女子大学教授）「穢土としての身体—日本中世絵画に描かれた病と死体—」 ・小野真由美（主任研究員）「写された枇杷図—狩野探幽と江戸の再生（リヴァイバル）」 ・馬淵美帆（神戸市外国語大学准教授）「田楽を作る歌仙—伊藤若冲の歌仙図について」 ○外部からの聴講者は11月2日が116名、3日が109名の参加を得た。		

講演会の様子



講演会の様子

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、両日合わせて225名の一般参加者を見た。参加者からのアンケート結果では、11月2日の80名の回答者数のうち、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ96.3%、11月3日の93名の回答者のうち「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ89.2%の回答を得ることができ、時宜に合った講演テーマにて実施できた。②独創性においては、「かたちからの道、かたちへの道」という大テーマのもと、日本美術の多様な作品についてこれまで未発表であった研究成果を公開できた。③発展性においては、日本美術について多様な面から研究成果を一般に公開できた。④継続性においては、「古典の日」に合わせ、さらに台東区の「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の一環としての協力を欠かさずに続けて開催している。また、定量評価においては、年1回開催の目標を達成し、アンケートにより参加者の高い満足度を得た。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	A	
【目標値】		【実績値・参考値】			定量評価
・講演会の開催回数 1回		(実績値) 目標値開催回数 1回 (参考値) 講演会の来場者数 225名			B

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	28年度に続き今中期計画2年目にあたる29年度のプロジェクト事業を計画通り達成できた。30年度も同様に「かたちからの道、かたちへの道」をテーマとして、講演者2名、2日間の形態で開催する予定である。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 3)ウェブサイトの充実 ・東文研総合検索システム ・東京文化財研究所刊行物一覧 ・学術情報リポジトリ
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○二神葉子（文化財情報研究室長）、小山田智寛（研究員）、三島大暉（アソシエイトフェロー）、逢坂裕紀子（研究補佐員）、安岡みのり（研究補佐員）	
【年度実績と成果】		
○ネットワーク環境の整備・充実		
・27年度に導入を開始した大容量ストレージシステムに、30年3月、ストレージサーバを追加、容量を増強するとともに、30年度更改予定のWWWサーバの基盤を整備した。また、30年3月、DHCP（ネットワークアドレス自動割当装置）を更新した。		
○情報セキュリティの強化		
・ネットワーク機器及びソフトウェアに対し保守・監視を行い、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換しつつセキュリティ水準の維持・向上に努めた。特に、10月に既存の資産管理システム「AssetView」に同ソフト未導入端末のネットワークへのアクセス制限機能を追加し、セキュリティの向上を図った。		
・当研究所職員の情報セキュリティへの意識向上を目的に研修を開催した（情報システム部会平成29年度第1回研修会（9月21日）、講師：二神、小山田、同・第2回研修会（30年2月21日）、講師：三島、小山田、二神）。		
○情報発信機能の強化		
・4件のウェブデータベースの新規公開、既存データベースへのデータ追加や機能改善を実施した。		
・ウェブサイトを適宜更新した。		
○その他		
・文化財アーカイブズ研究室及び近・現代視覚芸術研究室と連携し、データベース管理システム「Oracle」による所内データベース「刊行物アーカイブシステム」「売立目録」「日本美術年鑑入力支援システム」をカスタマイズし、利便性を向上させた。		

エンドユーザにできる対策

自分は大丈夫、と思わない

- ・ 本命を攻撃する踏み台として狙われる（乗っ取り、遠隔操作）
- ・ ネットワーク内その他のPCからのウイルス感染
- ・ USBメモリなどによるネットワークを介さない感染
- ・ 公式サイト（通販、銀行など）、知人や友人のメールアドレスが乗っ取られている可能性

研修会資料（対策の例）

エンドユーザにできる対策

- 自分は大丈夫、と思わない
- ・ 本物を攻撃する踏み台として扱われる（乗っ取り、遠隔操作）
 - ・ ネットワーク内の他のPCからのウイルス感染
 - ・ USBメモリなどによるネットワークを介さない感染
 - ・ 公式サイト（通販、銀行など）、知人や友人のメールアドレスが乗っ取られている可能性

研修会資料（対策の例）

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、データベースの新規公開、データ追加は我が国の文化財に対する国内外の関心にこたえるもので、時宜に適ったものである。②独創性においては、公開データベースは無料のデータベースエンジンと、ウェブコンテンツを統合的に管理する content management system(CMS)により独自に開発したものであり独創性が高いといえる。③発展性においては、大容量ストレージシステムは複数のストレージサーバを一体的に扱うことのできるシステムで、28年度に引き続き容量を増強した。また、異なるデータの横断検索が可能で、画像、テキストいずれをも扱うことができるデータベースを構築、今後のデータベースの多様化にも対応していることに高い発展をみた。④効率性においては、情報システムへの理解を深める所内向け研修など、とても効率よく活動を所内外に伝達できた。このことは、当機構の標的型メール攻撃訓練においても開封した職員が皆無であるなど、効果がみられたことから検証できる。⑤継続性においては、ウェブサイト更新による情報発信、セキュリティ水準向上への対応も継続的に実施した。⑥定量評価は、目標値の120%以上のデータベースを公開できた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	A	B
【目標値】 ・データベースの公開件数 18件		【実績値・参考値】 (実績値) データベースの公開件数 26件 (参考値) データベースのデータ件数 1,233,111件 データベース等へのアクセス件数 1,643,823件			定量評価 A

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。
評定理由及び今後の見通し	上記の中期計画の記載事項についていずれも所期の目標を達成した。30年度以降も、運営費交付金や外部資金による他プロジェクトと連携し、効率的に調査研究を実施する。また、情報システムセキュリティの確保に留意しつつ、調査研究及びウェブを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行うとともに、国内外での事例調査を実施し、文化財情報データベースをさらに拡充する。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 1) (平城宮跡資料館)・企画展「永野太造作品展 - 草創期の奈文研を支えた写真家 -」(4月29日～5月31日)・企画展「夏の子ども展示 (仮称)」(7月22日～9月3日)・特別展「地下の正倉院展」(10月14日～11月26日)・ミニ展示「新春企画 平城京のいぬ (仮称)」(30年1月4日～1月28日)(飛鳥資料館)・特別展「藤原京を掘る・藤原京一等地の調査・」(4月28日～7月2日)・企画展「第8回写真コンテスト「飛鳥の路」作品展」(7月28日～9月3日)・特別展「壁画古墳の考古学 (仮称)」(10月6日～12月3日)・企画展「飛鳥の考古学 2017」(30年1月26日～3月18日)
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ (責任者に○)】○森本晋 (部長)、加藤真二 (展示企画室長)、石橋茂登 (飛鳥資料館学芸室長) ほか	
【年度実績と成果】		
●平城宮跡資料館 ・春期企画展「永野太造作品展 - 草創期の奈文研を支えた写真家 -」実施 (4月29日～5月31日) ・夏期企画展「ナント！すてきな！？平城生活」実施 (7月22日～9月3日) ・秋期特別展「地下の正倉院展 - 国宝 平城宮跡出土木簡 -」実施 (10月14日～11月26日) ・新春ミニ展示「新春企画 平城京の戌」実施 (30年1月4日～1月28日) ・常設展展示物・施設のメンテナンス、常設展一部改修・展示替え ・質問、取材、案内対応 (4件/週)。展示物等の貸借業務 (20件) ●飛鳥資料館 ・春期特別展「藤原京を掘る - 藤原京一等地の調査 -」(4月28日～7月2日)開催。6月10日講演会開催。 ・夏期企画展「第8回飛鳥資料館写真コンテスト「飛鳥の路」」(7月28日～9月3日)開催。 ・秋期特別展「高松塚古墳を掘る - 解明された築造方法 -」(10月6日～12月3日)開催。10月28日講演会開催。 ・冬期企画展「飛鳥の考古学 2017」(30年1月26日～3月18日)開催。 ●藤原宮跡資料室 常設展示に加え、①藤原京右京九条二・三坊、瀬田遺跡出土遺物、②藤原宮大極殿院回廊出土遺物、③飛鳥地域出土湖西窯産須恵器、④奥山廃寺出土朱線付平瓦、⑤瀬田遺跡出土台付編籠パネル、⑥大宝元年元日朝賀復元イラスト、をロビーで速報展示		



平城宮跡資料館常設展改修作業

飛鳥資料館秋期特別展

ギャラリートーク



平城宮跡資料館常設展改修作業

飛鳥資料館秋期特別展
ギャラリートーク

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

①適時性においては、平城宮跡出土木簡が国宝に指定されたタイミングで秋期展を実施できた。飛鳥資料館では、奈文研の発掘調査成果が正報告書として刊行されたタイミングで研究成果を春・秋期展として公開できた。藤原宮跡資料室においても速報展を行うことができた。

②独創性においては、平城宮跡資料館の夏期企画展では平城京の主な住人である役人の一日、一年、一生について子供向けに展示し大人からも好評だった。リーフレットを近隣の小学校へ学習用に提供した。奈文研ならではの独創的な展示であった。

③発展性においては、飛鳥資料館において春期展における模型への画像投影による展示、秋期展での内部に入れる実物大石室模型など、従来のケース内展示と一線を画す挑戦的な手法や体験的展示を行っていることが高く評価できる。

④効率性においては、平城宮跡資料館の春期企画展を帝塚山大学と共催し同大学の写真乾板を利用できた。また、同大学の広報やネットワークによって、奈良市写真博物館などにも周知することができ、同大学生、写真ファンなど、新たな来館者を掘り起こすことができた。

⑤継続性においては、平城宮跡資料館・飛鳥資料館での各企画展は、継続的に実施しており、恒例の展覧会として定着している。

・定量評価について、平城宮跡資料館・飛鳥資料館それぞれで特別展・企画展を年間4件ずつ開催することができた。

以上から目標以上の実績をあげて、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	A	A	A	B	B

【目標値】

(1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数 4件

(2) 飛鳥資料館特別展・企画展開催件数 4件

【実績値・参考値】

(実績値) (1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数 4件

(2) 飛鳥資料館特別展・企画展開催件数 4件

(参考値) 平城宮跡資料館 入館者数 104,279 名 開館日数 307 日

飛鳥資料館 入館者数 33,696 名 開館日数 304 日

藤原宮跡資料室 入館者数 8,162 名 開館日数 359 日

図録等刊行実績：リーフレット等 7 件

①『永野太造作品展』(A5判フルカラー14 ページ 4 月 29 日発行)

②『ナント！すてきな！？平城生活』(A8判フルカラー24 ページ 7 月 22 日発行)

定量評価

(1) B

(2) B

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、公開施設における特別展・企画展の開催件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	順調に事業をすすめられている。当研究所の調査研究成果を展示に生かした魅力的な展示や関連企画は独創的かつ有意義なものであり、高く評価できる。今後もさまざまな研究成果をわかりやすく展示することで、文化財研究の魅力を多面的に発信することが期待できる。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。 2)平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用の改善検討により活動を向上させる。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアの研修内容の充実及び運用改善	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○津田 保行（連携推進課長）、梶原 孝次（連携推進課課長補佐）、岩井 靖子（連携推進課事務補佐員）、林 尚代（連携推進課事務補佐員）、京牟礼 薫（連携推進課事務補佐員）	
【年度実績と成果】		
○解説ボランティア研修等 解説ボランティアの育成に資するため、平城宮跡資料館における特別展、企画展にかかる解説研修を以下のとおり実施した。また、29年度から新たに、解説ボランティア向けの発掘調査現地説明会、勉強会を実施した。 ・平城宮跡資料館春期企画展解説研修 29年4月28日・5月1日 ・平城宮跡資料館夏期こども展示解説研修 29年7月21日・24日 ・平城宮跡資料館「地下の正倉院展」解説研修 29年10月12日・16日（Ⅰ期）、10月30日（Ⅱ期）、11月13日（Ⅲ期） ・解説ボランティア向けの発掘調査現地説明会（平城宮跡東院地区） 29年12月22日 ・解説ボランティア勉強会 30年1月15日・20日、2月17日・19日、3月17日・19日（毎月同内容で2回開催、平城宮跡資料館の展示等）		
○解説ボランティアの新規募集及び制度運用改善 研究部と事務部が一体となった、ボランティア懇談会を組織し、解説ボランティア制度の運用改善等について検討を行い、グループ制、リーダー制の導入、定期的な勉強会・連絡会議の実施等を盛り込んだ新制度を策定した。 解説ボランティアの新規募集を行い、186名の応募者から174名を採用した。また、採用者に向けて、平城宮跡における当研究所の最新の研究成果を踏まえた基礎研修を企画実施した。平成30年3月24日に平城宮跡歴史公園の開園に伴い開館した平城宮いざない館の詳覧ゾーン（奈文研の出土遺物、レプリカ等を貸与して展示）に、勉強会（講義・実地研修）解説ボランティアを新たに定点として配置して解説案内を行った。また、29年度から解説ボランティアからの意見を随時取り入れ、運用改善等に役立てるため、当研究所と解説ボランティアの班長による連絡会議を月1回開催した。 ・平城宮跡解説ボランティア懇談会（29年度は16回開催） ・解説ボランティア基礎研修 第1回29年10月28日・11月27日、第2回11月13日・18日、第3回11月20日・25日（それぞれ同内容で2回開催） ・解説ボランティア連絡会議（29年度は3回開催）		

年度計画評価		A			
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、所内に研究部と事務部が一体となって組織した平城宮跡解説ボランティア懇談会において、制度運用の改善を検討し、グループ制、リーダー制の導入、定期的な勉強会・連絡会議の実施等を盛り込んだ新たな制度を策定し、解説ボランティアの新規募集を行い、新制度のもとで活動を開始することができた。また、開館日当日から平城宮いざない館の詳覧ゾーンに新たに解説ボランティアを配置し、解説案内を行った。②独創性においては、解説ボランティアの基礎研修として、平城宮跡における当研究所の最新の調査研究成果を踏まえ、講義に加え、解説案内に即した実地研修を企画実施した。③発展性においては、新制度の下、勉強会や連絡会議を毎月実施し、ボランティアからの意見を随時取り入れる事で、活動の活性化や運用改善を図る体制を整えた。④継続性においては、これまでの活動を中断する事なく新制度に移行することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	B	
【目標値】		【実績値・参考値】 (参考値) ・ボランティア登録人数：164 人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：70,413 人 ・解説活動日数：304 日			定量評価
					—

中期計画評価	A	
中期計画記載事項	宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成する。	
評定理由及び今後の見通し	研究所の研究成果等をより広く、効果的に発信していくことを目指し、当研究所の研究部と事務部が一体となった体制を整え、平城宮跡解説ボランティア制度について運営体制等見直しと、解説ボランティアの新規募集を行い、平成30年1月から新たなボランティア制度のもと、活動をスタートさせることができた。今後、この新制度を円滑に運用していくとともに、定期的な勉強会や研修を通じて、ボランティアの育成を行っていく。また、連絡会議の場を通じて、ボランティアの意見等を取り入れつつ、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。	